

令和元年報恩講法話
三方よしの精神

正信寺 釋英和

三方よしの精神

釋英和

【はじめに】

本日は、お忙しい中、お参りいただきまして、ありがとうございます。

「三方よし」という言葉は、近江商人の商売哲学のことです。今日は、何で、浄土真宗のお寺で「三方よし」の話をするのかも含め、お話しさせていただきます。

【三方よしの考え方】

三方よしの三方とは、なんだかご存じでしょうか。

「売り手よし、買い手よし、世間よし」

これが、三方よしです。

まず、「売り」ですが、自分に仕入れをさせてくれる売り主です。自分が儲けようとするならば、仕入れ価格を下げてもらうのが、商売をするうえで基本となりますが、買ったたくのではなく、仕入れ先にも喜んでもらうような価格で購入するということです。次に、「買い手よし」です。これは、自分が仕入れ、生産したものを買っていただくお客様が、買ってよかったですと満足することです。先ほどと同じように、儲けたいと思うなら、少しでも高値で販売して、利益を多く出したいところですが、「だまされた」、「ぼったくられた」と思われても、商売を続ける上ではダメなわけです。

恥ずかしい話、私は、この言葉を聞いた時に、「世間よし」という言葉

を勘違いしておりました。つまり、仕入れ先も売り先も満足して商売をすれば、自分も最終的に儲かるし、世間の人から感謝されることだと思っていました。これこそ、利他が自利を呼ぶような浄土真宗的な考えと思っていました。

正しくは、売り主も満足し、商品を買ったお客様も満足する商売をすることで、社会が良くなることを言います。社会が良くなるというのは、どうすればよいか、どのようなことか、なかなか、ピンと来ないかと思えます。

例えば、こういうことです。

鍛冶屋さんはいい農機具を作っても、営業力を持っていなかったとします。私が、この商品を仕入れて、不便な山里の農家まで運んで行って販売したとします。鍛冶屋さんは、自分の近所だけでは、それほどたくさん売れないのですが、山里のお客さんまで売れるようになれば売り上げが増えて喜びます。また、山里の農家では、良い農機具を買うには、遠い町に出かけないと買えないのですが、私が売りに来てくれれば時間も移動の費用も助かるわけです。その結果、広い農地が耕せて、おいしい食物がたくさん生産されると、世間の人も、おいしいものが手に入るようになり、世間もよくなります。こういったことを私があればよいということではないかと思えます。

すなわち、私が鍛冶屋さんから鋤や鍬を仕入れて、適切な価格で農家に卸してあげるような流通ができれば、多くの人においしい食べ物を届けられるきっかけを作れるということが、三方よしなのです。

これは、自利にもつながりますが、利他の精神も含まれているということではないかと思えます。

【企業理念の先駆け】

バブルのころには青年実業家といわれる、不動産を転売して大儲けをした人たちがいました。「土地ころがし」という言葉を生みました。下町の個人商店をやくざまがい追い出すように買い上げて、大規模開発する「地上げ屋」という言葉もありました。

バブルがはじけ、リーマンショックが訪れて、かつての青年実業家はどうしているのでしょうか。消息は、なかなか聞こえてきません。昔のようには、羽振りが良くないことだけは確かだと思います。近年は、GAF(A)（グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン）と呼ばれる「企業や、長者と呼ばれるネット関連企業の経営者に青年実業家は、とってかわられたようです。つまり、青年実業家は継続的な利益を出していなかったということだと思います。

バブルのころ、フジテレビ買収で世間を騒がせた村上ファンドの代表は、「企業は儲けてはいけませんか？」という発言を堂々とテレビでしていました。高度経済成長の時代には、まじめに働けば、経済規模が大きくなって、暮らし向きが豊かになっていきましたが、低成長時代になると、法律を守ってさえいれれば何してもよいと考える人が多くなったように感じます。しかし、そうした利益至上主義の企業の隆盛をみると、継続的な発展をしていないというのは、皆さんも感じるところではないでしょうか。

個人的には、「急に成長した企業は、急につぶれる。長年繁栄した企業は、なかなかつぶれない。」と感じます。これは、資本の大きさだけではなく、長年生き延びるためには、時代の流れや、技術の進歩に寄り添って、業態を変えていくことで、継続的に利益を出していく企業のDNAが必要なのだと思います。

日本では、長年利潤追求はタブーでした。弱いものから金を巻き上げて贅沢をすることは、違法、合法といった価値観を超えてやってはいけないと教えられてきました。これは、仏教の貪瞋痴の貪（むさぼり）はいけないという価値観なのだと思います。

継続的な発展をしている企業では、目先の利益に飛びつかないように、儲け主義に走らないように企業理念（CSR）というものを打ち立て、社員全員が大切にしている価値観を共有化しようとしています。CSRを日本で最初に打ち立てた企業に、伊藤忠商事があります。

【近江商人とは】

ここから先は、伊藤忠商事のHPから、引用しています。

頭に菅笠、縞の道中合羽をはおり、肩には前後に振り分けた荷を下げた天秤棒。江戸時代から明治にかけて活躍した近江商人の典型的な行商スタイルです。

近江商人とは、近江国（現在の滋賀県）に本宅（本店、本家）を置き、他国へ行商して歩いた商人の総称で、大坂商人、伊勢商人と並ぶ日本三大商人のひとつといわれています。「近江の千両天秤」ともいうように、天秤棒一本から財を築き、三都（江戸、大坂、京都）をはじめとする全国各地に進出し、豪商と呼ばれるまでに発展していきました。



伊藤忠商事の創業者・初代伊藤忠兵衛もその一人です。麻布の持ち下りが商いのスタートでした。関西から関東をはじめとする全国各地へ行



商することを「持ち下り」といい、反対に地方の産品を関西へ運び売ることを「登せ荷」といいました。近江商人は自分の足で歩いて各地の需要や地域による価格差などの情報を仕入れ、全国的規模の商品流通を行いました。こうした商いは、やがて日本経済が発展していく上で大きな役割を担いました。

近江商人の経営哲学のひとつとして「三方よし」が広く知られています。「商売において売り手と買い手が満足するのは当然のこと、社会に貢献できてこそよい商売といえる」という考え方は、滋賀大学宇佐美名誉教授によれば、『売り手によし、買い手によし、世間によし』を示す『三方よし』という表現は、近江商人の経営理念を表現するために後世に作られたものですが、そのルーツは初代伊藤忠兵衛が近江商人の先達に対する尊敬の思いを込めて発した『商売は菩薩の業（行）、商売道の尊さは、売り買い何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心になうもの』という言葉にあると考えられる。」とのことです。自らの利益のみを追求することをよしとせず、社会の幸せを願う「三方よし」の精神は、現代のCSRにつながるものとして、伊藤忠をはじめ、多くの企業の経営理念の根幹となっています。

【伊藤忠兵衛】

初代伊藤忠兵衛は、1842年（天保13年）7月2日、滋賀県犬上郡豊郷村八目に五代伊藤長兵衛の次男として生まれました。伊藤忠商事創業者の誕生です。

伊藤家はいわゆる近江商人の家であり、「紅長（べんちよう）」の屋号で、地場の「高宮餅」「野洲晒」などの繊維品の小売業を営んでい

ました。

初代忠兵衛が大阪経由、泉州、紀州まで「持ち下り」といわれた行商を始めたのが1858年（安政5年）、忠兵衛15歳のときでした。この年を伊藤忠商事創業の年としています。

持ち下りは次第に販路を広げ、九州地区にまで進出し、その実績を足場に1872年（明治5年）には大阪の東区本町2丁目で呉服太物商「紅忠（べんちよう）」を開店するまで大きく成長を遂げました。

初代忠兵衛は紅忠開店と同時に「店法」を定め、店主と従業員の相互信頼をもとに合理的な経営を行うための施策を打ち出しました。例えば店内の会議制度の施行、利益三分主義の実践、洋式簿記の採用、現金取引の実行など、当時の商店としては一歩進んだ経営で事業を広げていきました。

1884年（明治17年）には紅忠を「伊藤本店」と改称しました。また「伊藤京店」を開店、翌1885年（明治18年）には「伊藤外海組」を組織し、海外貿易に乗り出しました。明治20年代に入ると、明治政府の諸施策が整い、経済界は大きく発展し、紡績を中心とする綿製品の輸出も活発となりました。こうした激動の時代の中で、創業者伊藤忠兵衛はその商才を発揮し、「積極・機敏・合理」の経営方針のもと、今日の伊藤忠商事の礎を築きました。

初代忠兵衛は、商人として生まれながらの商いの感性を持った人物でした。近江商人の家に生まれた忠兵衛は熱心な浄土真宗の信者であり、「商売は菩薩の業、商売道の尊さは、売り買い何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心になうもの」という「三方よし」を生徒実践した真の「商人」でした。

1903年（明治36年）7月8日、初代伊藤忠兵衛は永眠しました（享年

年(61歳)。(以上、伊藤忠商事HPから引用)

【近江商人と浄土真宗】

近江商人が生んだ「三方よし」の考えは浄土真宗の教えから生まれたようです。近江商人の多くは浄土真宗に深い信仰心がありました。近江商人は商売人を引退し隠居生活に入ると、宗教活動を行いました。そこで浄土真宗の教えを基に家訓・店則を定めたのでした。そもそも近江商人は、なぜこれほどまでに浄土真宗を信仰していたのでしょうか。

辻井清吾が書いた論文「近江商人の経済倫理と信仰の意義」では「一五世紀に真宗本願寺の中興の祖として著名な第八代法主蓮如が熱心に布教・教化活動をなした地域が近江であり、江戸時代には、真宗の盛んな地域となった。又、近江商人の家訓・店則に見られる各々の宗教意識には「仏法を信じ、慈悲をもって日常生活を過ごし、先祖を祭る事により、一家の伝統を守る事」の精神が自然の流れとして連綿と見られる。又、家訓には、「和合」「出精」(精を出して働く事)「不奢」(奢る事なくケチる事もなし)「孝行」の言葉が多くみられ、社会構造の変化に真宗が対応しつつあり、近江商人はこのような時代・地理的背景の下で成長し、真宗の世俗倫理観を受容していった。」と書かれているように、この蓮如の布教活動により近江商人から浄土真宗門徒を多く輩出した。近江商人の多数は遠方の商売に向かう途中にある浄土真宗の寺院に立ち寄るなど、熱烈的な浄土真宗の信者になったという。(高知工科大学マネジメント学部岸教授論文)

【日常をよりよく生きる】

江戸初期の鈴木正三(しょうざん。1579-1655)の「万民徳用」を引用したいと思います。

農民は仏道修行の暇が無い、どうしたらよいか…という問いに次のように答えます。

「農作業がそのまま仏行だ。心得が悪い時には卑しい仕事となる。心が堅いときには菩薩の行となる。暇を得て修行・成仏しようとするのは誤りだ。必ず成仏を遂げようと思う人は農作業でもって心身に鞭打つ。楽しみばかりの来世を願うものはかえって、万年を過ぎて成仏できぬ。極寒・極熱の辛苦の農作業をし、すき・くわ・かまを用いて、煩惱の草茂るこの心身を敵とし、土地をすき返すように、雑草を刈り取るようにと心得て、ひたすら攻めに攻めて耕作せよ。

暇ができると煩惱の草が増える。辛苦の農作業で心身を攻めている時は、あれこれ心配をする隙が無くなる。このように四六時中、農作業とともに仏行を成しているのだから、農民だといってよその修行をうらやむ必要はない。たとえ寺院で礼拝をもつばらにする人でも我執の念が消えないと、どんな尊い修行を成してもみな輪廻の悪業となる。成仏も随地獄も、その鍵は心のありようであって、行為にはない(中略)

田畑を耕すひとクワ毎に南無阿弥陀仏と唱え、ひとカマ毎にその心に安住して、余計な心配をせずに農作業を成すなら、田畑も浄土となり、五穀も清浄な食となって、食べる者の煩惱を消滅させる薬になる。どうして天がこの人を守護しないはずがあるうか…「万民徳用」／鈴木正三・著／正三没後の1661年に出版／

鈴木正三は、家康に仕えて大阪の陣で戦功を立てた武士ですが、42歳で出家して曹洞宗の僧となって庶民の教化に努めました。その法語

の代表が「万民徳用」で、士農工商の家業に縛られた人々に、それぞれの仕事を通して仏道に励む方法を迫真の口調で簡潔に説きました。曹洞宗でありながら、念仏の重要さを伝え、平易な法語による近世職業倫理の嚆矢です。他に武士・職人・商人の生き方について書かれています。私は中公新書の現代文訳を読みましたが、畳み掛けるように澁刺とした流れがあるので、正三の熱意を感じるために、原文に当たってみたいと思っています。

【おわりに】

鈴木正三は、江戸時代に、農民、武士、商人に対して、職業倫理を説いています。煩惱には走らず、禁欲的な労働に没入せよ、自分の職業を南無阿弥陀仏と称えながら行うことで救われると述べています。

これは、キリスト教の宗教改革をしてプロテスタントとなったマルティン・ルターやカルヴァンが説いた職業倫理、労働倫理と相通じるように思えます。十六世紀のカトリックは、罪を犯しても免罪符を買えば救われるというように墮落をしていましたが、それを批判したのが、ルターです。

ルターはドイツの人です。カトリックから迫害を受けたヨーロッパのプロテスタントを信仰する人は、アメリカに移住した人にも多くいます。アメリカでは、今でも大統領が就任するときに、聖書に手を当てて宣誓します。

こうした国々に、資本主義が根付き、経済成長を遂げています。G7とこう経済先進国の首脳会談があります。経済先進国と呼ばれる国は、他国に先駆けて産業を興し、貿易をして経済規模を拡大しました。

現在、G7を牽引している国は、プロテスタントが根付く国と浄土教の仏教が多数を占める日本です。カトリックのフランス、イタリアは、財政赤字に苦しんでいます。

日本も明治維新以来、経済発展を続けていますが、プロテスタントの神の前の平等と相通じる、浄土真宗の信仰を持つ「三方よし」の哲学を持った近江商人が、日本経済を支え、繁栄させてきたのだと感じています。反面、バブル崩壊以降、勤勉に働くことを尊重する精進、信心が薄れてきたため、長期経済停滞が起きたのではないかと考えてしまいます。

明治維新の時代、当時資本主義には程遠かった日本の経済を支えたのは、来世における仏の救済を信じ、現世で不当な利益を得ることをよしとせず、禁欲的に勤勉に、自己の労働に励み、合理性をかねそなえていた宗教倫理、経済倫理であったに違いないと思います。

私たちも、日常の仕事や家事を一心に行うことが仏行なのだと思います。信心があり、念仏があれば、それも菩薩の行になるといいます。三の教えを実行すれば、日常の仕事は、そのまま尊い行になると思えます。同じことをするのでも、心の持ち方により自分自身の満足度、日常の充実感が変わるように思います。

本日は、ご清聴いただき、誠にありがとうございました。

浄土真宗

安養山 正信寺